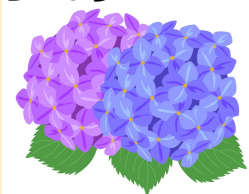


昭和肥料ニュース

FAX版



Vol. 070

夏至以降の生育の転換にご用心

地域差はありますが、今年の梅雨は合間合間で真夏並みの高温日があり、今後の夏本番の超猛暑が非常に心配です。そんな気象下で作物の多くが生育の転換期になる「夏至」を迎えました。この生育の曲がり角を上手に乗り越えましょう！

水稻の中干しについての注意点

生育の転換期が明確な作物の代表が水稻です。種を作る体を作る時期（栄養生長期）と、種を作る時期（生殖生長期）があり、その変換期の作業が大切です。

「中干し」は栄養生長期の中～後半に圃場の水を切る作業で、米作りで大切とされています。中干しは一般的に以下の目的で行われています。

- ①過剰な分げつ、節間徒長の防止（倒伏防止） ← 窒素の効きすぎを抑える
- ②根腐れを軽減し、稲体力を維持する ← 強還元状態の解消、葉色の回復
- ③機械での収穫作業時のぬかるみ防止 ← 早期の地固め（収穫時の作業改善）
- ④メタンガスの発生抑制 ← 環境の保全（補助金入手）

なお、農法や土壌条件では、中干しは思わぬ副作用があることに注意です。

- ・作土の過度の割れで断根 → 養分・水分の不足 → 品質低下・歩留まり減
- ・表土の温度上昇 → 高温障害のリスク増加、寒暖差で分げつ増加傾向
- ・窒素の効き増大（堆肥主体での施肥体系の場合） → 時期によっては倒伏発生

中干しは一発肥施用（初期生育の確保を重視）とは好相性と言われます。しかしそれは「地力がある」ことが前提のため 地力の低下した圃場や、堆肥（未熟な有機物）主体では必ずしも功を奏すとは限りません。

※根の再生（りん酸、鉄）、高温耐性（加里、けい酸）、倒伏耐性（けい酸、カルシウム）等の備えを怠らず、その上で適期間の中干しの実施が正解と言えます。

また、上記④目的に長期の中干しは、猛暑下では減収、品質低下のリスク増大に十分ご注意ください（渇水しがちな地域ではBS資材の併用を模索しておられますが成功事例は限定的なようです。水稻にはやはり水は必要かと思います。）

畑作での生育の曲がり角の打ち手は？

畑作物では「作物が各栄養素をゴクゴク飲めるように根の活力を維持する事」が大切です。特に夏場の肥料は少量を小まめに与えて、土壌水分は適量を維持することが極意です。（EC値は低めながら下限値を下回らず、pF値は適正範囲を堅守）

なお、上記※の備えは畑作物でも安定生産にも資するためお勧めです。